タデウシ・ボロフスキの韻文作品における アウシュヴィッツのビジョン

ウルシュラ・スティチェック

はじめに

人類史上、20世紀はもっとも恐ろしい、非人間的な時代であると言っても、過言ではない。南京、アウシュヴィッツ、広島・長崎は現代史における残酷な三大虐殺事件として知られているだけではなく、人間の残虐行為の象徴的意味をもっている。私には、この一つの悲劇的な国、ポーランドに生まれた者として、絶えず平和を訴える義務があると思う。日本人、中国人と肩を並べて、私も戦争の惨禍について語らなければならない。

我々若い世代は、第二次世界大戦の恐怖、とりわけアウシュヴィッツ収容所における人類の悲劇を、現在、元囚人の証言によってしか認識できない。証言あるいは証拠といえば、様々な形式、たとえば素人の日記や手記、絵画、語り部の話などがあるが、囚人であった作家の文学作品もある。

本論ではポーランド人短篇小説家・詩人、タデウシ・ボロフスキ（Tadeusz Borowski、1922—1951）の韻文の作品を通して、アウシュヴィッツの悲劇に対する彼のビジョンを検討してみたい。とりわけ小説家としてのボロフスキではなく、詩人としてのボロフスキについて考察したい。

アウシュヴィッツは全ヨーロッパの強制収容所のシンボルとなっている。この戦争の惨禍は人類の深い傷である。アウシュヴィッツについての真実は、どんなに多く語っても語りきれない。また、言葉を尽くしても語ることのできない主題でもある。それに対してボロフスキが、どのようにアウシュヴィッツの事実を詩的作法で伝えようとしているのか、という視点から本論を展開してみたい。

ボロフスキが作家として認められて有名になったのは、戦争直後、つまり1946年に二人の作家（ヤヌシ・ネル＝シェドレツキ、Janusz Nel Siedlecki、クリスティン・オルシェフスキ、Krystyn Olszewski）とともに、アウシュヴィッツについての短篇集をドイツで発行してからである。そのため、小説家というラベルがボロフスキには貼られた。だが、すでに戦時中、彼はデビュー作である詩集を地下出版で発表し、限られた環境で才能のある若い詩人として評価されていた。また、アウシュヴィッツに送られて、詩を書

き続けたが、それらはあまり保存されていない。その後、ドイツ国内の収容所へ護送され、また詩を執筆し続ける。1945年に米軍によって解放され、〈捕虜収容所〉に入られても、相変らず詩を書いているが、その数は次第に減っていった。

1　戦争世代の詩人・小説家

ボロフスキの詩をより深く理解するために、戦争時代における彼の様々な活動をおさえておこう。

彼が17歳になった時、第二次世界大戦が勃発した。1940年の秋、ボロフスキは地下教育制度のワルシャワ大学のポーランド学科に入学し、当時最も偉大な教授たち（ユリヤン・クシジャノフスキ教授 Julian Krzyzanowski、ゾフィア・シュミットヴァ教授 Zofia Szmydtowa）のところでポーランド文学について研究していた。公式には大学生の身分は禁じられていたので、表向きは労働者として働きながら、研究を続けていた。また、勉強と仕事のあいまに詩を作り続けた。1942年12月、ボロフスキはデビュー作、『どこかに地球....』(Gdziekolwiek ziemia ...)という詩集を自費で出版した。この詩集は当時の文壇に大きな衝撃を与えたが、二ヵ月後、1943年２月25日、ゲシュタポによって逮捕された[(1)]。ただちにアウシュヴィッツへ護送された。収容所に入って彼は自分の名前を失い、119198号の囚人番号となった。まだ若いボロフスキは電柱を運ぶ仕事して、収容所の外で働いていた。しかし、直ぐ肺炎に罹って、「クランケンバウ」(Krankenbau、病院）に入院させられた。入院は、遅かれ早かれガス室へ送られるという意味をもち、退院する場合はとても少なかった。しかし、ボロフスキは幸運な一人であった。彼は若くて、力強くて、また才能のある詩人であり、収容所において地下運動組織のおかげで、彼の生命は救われた。少し健康を回復すると、病院に残されたまま、「ナホトヴァハ」(nachtwacha、夜間守衛)、そして「フレゲル」(fleger、看護人）の仕事をさせられた。そのため、アウシュヴィッツの一年間以上を〈肉体的に〉生存できたのであるが、確かにこの恐ろしい経験は彼の心に大変な傷を生じたに違いない。収容所で留置されたとき、詩、歌、クリスマス聖歌などを作って、他の囚人たちを励まし、生き延びる力と意志を与えたりした。知り合いの囚人の回顧によると、彼はいつも明るくて、陽気な若者であったようである。

一年半後の1944年８月にナチスの撤退とともに、１万２千人の囚人の一人としてボロフスキは、シュツットガルト (Stuttgart) の郊外にあるダウトメルゲン (Dautmergen) の収容所へ護送された。そこから1945年２月にまたダッハウ＝アルラッハ（Dachau-Allach) の収容所へ運ばれた。1945年５月１日、米軍によってこの収容所は解放された。

後は、ミュンヘン（München）の郊外にあるフライマン（Freimann）の収容所に同年9月までいた。その時期に書いた詩、諷刺文が知り合いの編集者の協力により、ミュンヘンで出版された。戦後に書かれた、彼の二番目の詩集『流れの名前』（1945、Imiona nurtu）がドイツで発行されたが、実はこれはボロフスキの最後の詩集となった。その後彼は社会福祉の活動家として忙しくなる。1946年5月31日に送還者の一人として帰国するまで、ミュンヘンにあるポーランドの赤十字の委員会の家族探求協会（Biuro Poszukiwania Rodzin）で働いた。

25歳のボロフスキは、ポーランドへ帰る最後の日まで、西欧に残るか、あるいは未知の〈新しいポーランド〉へ帰るか、という問題の前に立たされたが、結局、国に戻るのである。だが、この決心は、その5年後に遂げる自殺の理由の一つとなったかもしれない。当時、ボロフスキの決心は次のように解釈された。アウシュヴィッツ収容所の生き残りとして、証言者としての責任を持ち、それを経験しなかった国民にその恐ろしい話を伝える使命を果たすべきであると。彼は自分に語り部の役を与えたのである。ボロフスキは作家として、またジャーナリストとして、ポーランドで活躍すべきであると考えた。

帰国する前、1945年9月から12月まで、ミュンヘンで知り合った編集者、アナトル・ギルス（Anatol Girs）の努力で、ボロフスキは元囚人である二人の作家とともに『我々はアウシュヴィッツにいた』（1946、Bylismy w Oswiecimiu）という短篇集を共同編集する。それはボロフスキがポーランドへ戻った後の1946年6月にミュンヘンで発表された[(2)]。帰国の直後、彼は詩を書くことをほとんどやめて、1947年からワルシャワ大学のポーランド学科での研究を続けながら、アウシュヴィッツや米軍の収容所の生活について精力的に数多くの雑誌、新聞に散文や時事評論を投稿する。1946年の秋、詩の創作をやめた原因について、婚約者マリアに送った手紙の中で次のように説明している[(3)]。彼は自分を常に詩人として思っていたが、アウシュヴィッツの事実や戦後のポーランドの情勢について語ろうとしたら、これはボロフスキが使った詩の形式を越えたものとなり、詩人として完璧に表現できなくなったとボロフスキは訴えている。伝えたい事実は形式的に詩より散文や時事評論に近付き、彼が書いた詩でも次第に時事評論らしくなった。ボロフスキは本来は韻文を賛美した作家であったにもかかわらず、意識的に詩を止めて散文を選んで書くことになるのである。まだミュンヘンに居たころに書かれた「詩と詩人について」（O poezji i poecie）という詩でこのように告白している。詩は現実の流れに逆らうものであり、「詩人は世論に〈はい〉と言ったら、これは彼の罪になる。詩人になるのは、世論に〈いいえ〉ということだ。詩は絶え間ない探求である。なぜなら、探しながら、見つけられたものを避けるはず。見つけられたものは絶対詩にならない。これは

模索だけだ[4]」。彼の詩は世論に向かって、常に〈いいえ〉と反抗していた。評論家・伝記作家であるタデウシ・ドレヴノフスキ（Tadeusz Drewnowski）のことばを借りると、「ボロフスキの詩は何よりも世界に対しての青年の反逆だった[5]」。だが、24歳のボロフスキにはこの世界の現実を表わす方法は、詩以外ものとならざるを得なかった。

ボロフスキの短く惨めな人生には三つの収容所生活が最大の影響を与えている。彼は自分の経験をいくつかの短篇小説集に描いていたが、その中でも優れた短篇集は、前述の『我々はアウシュヴィッツにいた』、『マリアとの別れ』（1947、Pozegnanie z Maria）と『石の世界』(1948、Kamienny swiat)である[6]。また、アウシュヴィッツに直接に関係のある詩集は、ミュンヘンで発行された『流れの名前』しかない。

2　アウシュヴィッツの詩的想像

ボロフスキは学生時代から自分を詩人としか思わなかった。デビュー作は詩集であり、戦時中絶え間なく詩を作り続けた。戦後、詩人として生きていこうと希望したが、ポーランドの現実政治は、彼の意志を翻させた。結局、彼が書いた詩の数は少ないし、また収容所と戦争の混乱で、現在残されているのは、およそ170編だけである。まとまった形にしたのは、二つだけ、すなわち1942年に発表された『どこかに地球....』と1945年に発行された『流れの名前』である。

本論で分析する詩は1941―1946年の間に書かれたものである。

1）予言の詩集

ボロフスキが有名になったのは、戦争の悲劇を描写した小説を書いてからである。だが、デビュー作、『どこかに地球....』という詩集は、戦争の恐ろしさに関する予言的内容のために、当時、知識人階層の読者を驚かした。人類の絶滅が予感され、奴隷のような重労働がおこなわれる収容所の場面が描かれている。何の希望もなく同情もない残酷な世界が来ると、詩人ボロフスキは予言していたのである。人類における進歩、善良、秩序および人間性などの概念に対する悲観的見解が詩集を支配している。当時アウシュヴィッツについての事実はほとんど知られていなかったのに、わずか20歳のボロフスキは、予言者のように、この恐ろしい幻想を古典ギリシャの叙事詩であるヘクサメータ式の詩で表現した。まだ収容所の経験のない彼は、〈石の世界〉というような幻像を書いた。実は、戦後に発表された、ドイツ占領と収容所の体験に関する短篇集の題名は先に述べたように『石の世界』である。

『どこかに地球....』の一つの詩の世界をみてみよう。「軽蔑の時代」（Czas pogardy）

という詩で若い詩人は強制収容所について予言的に語ったり、もうすぐに世界が滅びるであろうと警告する。また、彼は詩人としての自分の無力さを実感して、こう訴える。(ボロフスキの詩の日本語訳がないので、以下筆者が和訳したものを載せ、詩の題名のみ原題も掲げた。)

怒りで締め付けた口で詩人の唄が黙っている

また、同じ詩において次のように書く。あたかもアウシュヴィッツの体験者のようにその地獄を記述しているのである。

眉毛をしかめたまま人間の眼が苦しそうに眺めている：
奴隷の群衆は　森の小道を追われて
樹木を斧で倒し　幹を土から引き抜き
指で根を掘り抜き　手で鋤を引っ張り
そして黒い岩に鍛造された地下の廊下で
足元から石を切り裂け　これらをピラミッドに持ち運び
顔は青白い　飢餓で錆びつくされ　看守の元足に倒れる
パンくずを哀願しながら鞭打ちのひゅうの音で死んじゃう
(「軽蔑の時代」より)

このような場面はたしかに古代エジプトを舞台としたものであるが、20世紀の半ばにこれが繰り返されようとは、多くの人は思わなかったはずである。だが、ボロフスキ自身全く同じような体験を数ヵ月後にする。『どこかに地球....』全体はこのような重苦しい叙情が支配している。

2) 囚人の忘却、絶望

アウシュヴィッツとビルケナウにおいて書き残された詩の数は少ないが、主題を分析すると、二種類に大別できる。ボロフスキが逮捕される前夜にすでに逮捕されていた婚約者、マリアへの愛情の祈願詩と、収容所に関する詩である。前者はこの論文にはあまり関係のない詩なので、ここで扱わない。後者を様々な角度から検討するのであるが、それらのライトモチーフとして外の世間が囚人のことを忘れてしまったという〈忘却〉、〈絶望〉の意識が揚げられる。誰も囚人の苦労、受難、焼却炉での死、餓死、射殺を知らないし、知りたくない。無関係、無関心が収容所の外の人間の心を支配する。

友達よ、ここに君のお墓ができない
畑の風は君の灰（遺骨）の一握りを吹き散らす
でも　気にしないで　――　なぜなら君は一人ではないのだから
世界が忘れたその数千人のうちの一人なのだから
（「針金に囲まれた世界の切れ端」(Drutami okolony skrawek swiata）より）

キリスト教者のひとりとして、ボロフスキはもう一つの忘却を訴える。囚人は神にも見捨てられたという見方である。このような意識はかなり強い。

ビルケナウ　――　呪われたビルケナウ
血と涙を注がれた、
神に忘れられた地獄の底！
ビルケナウ　――　刺の道
数千人の犠牲者の共同の墓
神のない悪魔の王国　――
これはビルケナウだよう！
（「針金に囲まれた世界の切れ端」より）

また、「死者の土地」(Ziemia umarlych)では、収容所が人家から離れた所にあるので、現地の人々だけでなく、周りの自然、鳥、山、川原も囚人の味方ではなく、彼らの悲劇を気付かず生存する。何もかもが囚人の嘆き声を聞こえないように生きている。流れている空の雲、傍を飛んでいる小鳥、渡り流れる川、すべては死者の目撃者であるのに、詩人である彼しかこれを訴えようとしない。

戦時中大学に通ったボロフスキは懸命にヨーロッパ文化の成果を勉強するのであるが、収容所ではこの文化の最悪の成果に対面させられた。20歳の詩人は、価値観の混乱に陥る。「婚約者へ」(Do narzeczonej)、あるいは「リンゴの木が道傍に立った」(Jablonie staly przy drodze）には、理想をまだ持っている若い詩人が世界を迷い、理想的な文化と現在の実態とは、どちらを信じるべきであろうか、自分の理想が正しかったかどうか、といったことが書かれている。絶望的な感情、共同の恐怖、囚人全員に平等の雪、雨、寒さ、飢餓、重労働、これらは同様の運命を予感させる。つまり死である。

ヨーロッパの八方から　ここへ寄ってきた　他国の我々は
一本の同じ道を歩いている　――　森へ　死者の土地へ

（「婚約者へ」より）

〈森へ〉とは、収容所以外の場所にも死刑執行があり、他の囚人が知らない場所に連れられて、囚人は森で射殺された。このような死刑執行については短篇「行っていた人々」(Ludzie, ktorzy szli) に書かれている。

3）生存者という罪

もう一つのライトモチーフが戦中・戦後の詩を徹底的に支配している。彼は生き残ったが、彼の友人達、若い詩人、同居の囚人が亡くなった。つまり、〈生存者の罪〉である。

その時期はボロフスキだけではなく、彼と同年の若い詩人たち、ガイツィ (Gajcy)、バチニスキ (Baczynski) なども希望のない人類を描いていた。だが、ボロフスキには個人的な悲劇があった。彼は戦争を初め頃にアウシュヴィッツに入れられたので、もっとも愛国主義的反乱、つまり1943年春のワルシャワ・ゲットー蜂起において戦ったユダヤ人を手伝うこともできなく、また1944年のワルシャワ蜂起に参加もできなかった。彼の友人たちの多くは兵士として、蜂起参加者として亡くなった。しかし、彼は生きている。（彼は戦後、「亡くなった詩人たち」(Umarli poeci) のなかで、殺された友人たちに敬意を表している。）

数百万人が殺されたにもかかわらず、自分は生き残って、無事に解放された。それがなぜなのかと、問うところにボロフスキの特徴がある。

これは膿瘍　これはチフスだ　これはガス室　これはガスだ
これは火、これは灰　――　誰でもない身体は風の中に
ここに叙事詩が生まれる　悲劇的な時が呼んでいる
僕は手を頭に上げる　そして黙ってる　その通り　マリア　僕が生きてる
（「婚約者へ」より）

亡くなった人々は？　戦争は終わったが　思考のなかで私は戻る
この煙へ　この白いアスターへ　すでにいない人々へ私は戻る
空に広がる火事を見る　友人たちの顔をみる。
彼らは　生きてる人々のために草原の斜面で地下へ下りた....
（「リンゴの木が道傍に立った」より）

〈生存者の罪〉というライトモチーフは、時の流れとともに作られた詩の数が減ってい

ても、彼が収容所で作った詩、また1945年にアメリカ軍に解放された頃までの詩と、1946年6月に帰国したあとの詩の中に、圧倒的に多い。無論、時代が代わり、その当時の政治情勢のため、また、たくさんの収容所の体験のため、青年時代に作った叙情が減り、その代わりに嘲笑の雰囲気、諷刺とともに淋しさが漂ってくる。それにもかかわらず、ボロフスキの〈生存者の罪〉という情感は、読者のこころを貫くほど痛みを生じる。若い詩人は生き残っている。

数千人の縦隊のかたちをして
男たちが〈愚かな攻撃〉[7]をしにくる
結ばれた手首を上げながら
生きている者を訴えようとする　――　――　(略)
死の軽蔑で印された
僕の友人たちは穴から立ち上がる　(略)

そして生きている者に反して　――　亡くなった詩人たち　――　――
うたのような訴えを持ち寄ってくる

永遠の深淵から人々が寄ってくる
天国から　煉国からも　地獄からも
生きている人間の身体を
最後の審判で裁くため

そして　殺された人々が許しの心を見つけられない
と僕はまだ信じてる
死んだもの　生きてるもの神様よ〈殺された者の復讐者〉よ
〈忘却の恩恵〉をお与えください　――　――　――
(「忘却の祈り」(Modlitwa o zapomnienie) より)

また、「僕は詩人だ」(Jestem poeta) という詩では、現実に対して、すでに敏感さを失った詩人の目で、戦中・戦後の情勢を描写している。人間の惨めさを目撃した痕は、心のなかに刻まれている。見た現実を忍耐できなかった時があって、他人のその悲惨さを観察していたが、彼は、人間として、何も助けることもできなかった。これはボロフスキ個人の悲劇の記しでもある。他人の死の目撃者であり、収容所の生存者であること

は、彼にとっては自分の罪である。

これが不思議だよ！　政治犯[8]に金を払う
黙るために

彼らがいたために....彼らは見たために....
しかし　ある夏にハルメザヌィで人間の遺骨を
池で葬ったことを思い出すと　——
手が揺れてる　　(略)

しかし　あなたたち生きてる者の中から誰かが死を見たのか　——　罪なしで？
全部を忘れてはならない　金で支払うから

そうだよう　現なまは世界と焼却炉とを仕切る
愚かな歴史　ロンドンの話....

*

兵士たちに給与を支払った　しかし　僕は詩人だ
つまり　死を死と呼ぶ　臆病は臆病と　——
もし僕は罪があるとしたら....霧のなかで見えるように....
そして　この金を手にしなかった....
(「僕は詩人だ」より)

この詩に類似する詩がボロフスキには多い。悩んでいる若い男性が主人公で、彼は国のためにいかなる戦場でも自分の命を捧げた兵士ではなく、ワルシャワ蜂起参加者として殺された詩人でもない。戦後の汚い政治的な戦略に巻き込まれて、戦前・戦時中に教えられた理想を失い、迷っているこの若い男性は、ボロフスキ自信でもあり、戦後ポーランドに起こった新しい事情に対してどのように立ち向かうべきか、彼には分からなくなる。ユダヤ人ではなかったので、アウシュヴィッツで生命が助かったのかもしれないが、逆に、数百人の囚人たちの死を見て、自分が死ななくてよかったのかどうか精神的に混乱する。このすべての悩みが詩に表わされている。

4）極端の状況における道徳、理念、倫理

ボロフスキの詩における収容所を見てみよう。すべての場面は、地獄の光景として描かれ、「人間の死体が木の削りくずの山のように燃える」というように描写される。「神はいない悪魔の王国」、「神に忘れられた土地」、地上にある完璧な地獄とされる。これはアウシュヴィッツであり、これはビルケナウである。次の詩はまだ1943年頃、つまりアウシュヴィッツで創作された作品である。

針金に囲まれた世界の切れ端、
それは人間が番号としてしかいない場所
それは卑しまれた兄弟がさらに自分の兄弟を苦しめる場所
死が骨張った掌を出す場所
そこはすでに血がたくさん　涙がたくさん流れた
そこは毎夜　恐怖の叫びで夢から目を覚ます
地獄はどこであると尋ねられたら
思い切って応えられるだろう

ビルケナウ　――　呪われたビルケナウ　（略）

焼却炉は煙を吐き出している
燃えてしまった死体の匂いは周りに広がる
囚人の労苦と刺の道の果て
旅の果て　――　人間の苦悩のおわり
（「針金に囲まれた世界の切れ端」より）

友人への手紙の形式、あるいはビルケナウにいた婚約者、マリアへのラブレターの形式をとりながら、アウシュヴィッツの描写を織り込んでいる。友情や愛情という平和な時代の感情が、収容所の恐怖とともに存在するのは、まるで当然であるかのようだ。

雨が泥に強く打ち当たる　生命のないように野原が広がる
また死体に溢れる木箱がラーゲリの後へ運ばれる
しかし　今夜少し寝た　それでもコラ君よ　聞いておくれ
そんなに悪くはないと夢の中で考えた
（「雨が泥に強く打ち当たる」（Deszcz zacina po blocie）より）

ボロフスキを「収容所作家」として有名にさせた「皆さま、ガス室へどうぞ」(Prosze panstwa do gazu) という短篇小説のモチーフは、以前に引用した「僕は詩人だ」という詩にも現われている。ここには、人類の惨禍が実現されることを知らずアウシュヴィッツへ移送されたユダヤ人、幼児、若い女性たちの強烈な悲劇が、詩の形式で描かれている。

短篇「皆さま、ガス室へどうぞ」と詩「僕は詩人だ」の主題は、ほとんど同様であるが、素材に対するアプローチの方法に、いくつかの相違がある。散文は、ことばをいくらでも使用できる文学的形式であるが、韻文は、正確で簡潔なことばだけで作者の考えを精密に表現できる文学的形式である。その意味でボロフスキの詩は傑作ともいえるであろう。少ない語彙を用いたにもかかわらず、それは読者の心を徹底的に貫く。それに、これはとても写実的なものである。

ある時　パンをユダヤ人と切り分けた
彼はその夜　煙突へ行った（選別の後だった）（略）

またラムパ[9]に....ソスノヴィエッツからの輸送列車が着いた
こどもから水を奪った（飲みたかったのだ）
しかし　この子は死を迎えたから　忘れる　　（略）

「どちらの道に行けばいいのか？　我々をどこへ導くか　教えて」
何も応えなかった　誰かが「ガス室へ！」と言えるだろうか
彼女は黙って僕の目を長く眺めた　――　軽蔑して
そして　トラックへの道を　――　選んだ....
（「僕は詩人だ」より）

美人の若い女性がガス室での死を予想もせず、ガス室へ向かうトラックへ乗っていくというモチーフは、その後、戦後の作品、「皆さま、ガス室へどうぞ」で悲劇的に発展されている。囚人の間に次の原則が導入された。死刑者には絶対に死の真実を教えてはいけない。どこに連れられるか、何のために荷物や宝石が奪われるか、風呂場は本当の風呂場のかと、職務に付いているボロフスキのような囚人は教えることもできなく、教えようとも思わなかった。この最後の大嘘はただ一つの人道的なルールであった。死に向かっている人間から、まだ生き残っている囚人は希望を奪うことはできない。

極限状況においては、人間は何よりもまず自分を守る。しかしこれは何であろう。利

己主義？ 自分の死に対する恐怖？ もしかしたら、人間の普通の反応であろうか。ボロフスキの詩に登場する主人公は同じように考え、振る舞っている。それ故に、〈生存者の罪〉のライトモチーフは頻りに現われている。コルベ神父のような強い信仰を持ったキリスト教信者だけが自分の生命より他人の生命を先に尊敬するが、普通はその逆であろう。

5）主人公について

詩全体には、「僕」という語り手がいる。それではこの「僕」は誰であろうか。これはかならずしもボロフスキ自身ではない。「僕」イコール「タデック」（Tadek）はフォルアルバイター（vorarbeiter、囚人頭）という職務を持ち、カポの手伝いとして働いている。詩のなかで登場する「僕」は、短篇の主人公よりは道徳心のある囚人であり、生き残るためにどのような状態にでも適応できる人物としては、あまり強く描写されない。収容所の悲劇に〈参加する者〉、つまりフォルアルバイターの立場から描写するのではなく、犠牲者としてでもなく、むしろ悲劇を〈観察する者〉の立場から描いている。その〈観察者〉は生き延びるために他人を助けもしないし、他人を裏切ることもしない。彼も何もしないが、敏感な詩人としては心のなかで収容所のすべての様子を記録している。

ところで、文学評論史のなかでこのような矛盾のある主人公は大きな反響を呼び起こした。ボロフスキ自身の名前が使われたので、詩人は自分のことについて語っているという誤解が生じたのである。（タデックはタデウシの愛称である。）

ボロフスキが描写するアウシュヴィッツの囚人の集団は、他の作家の「収容所文学」作品と異なって、英雄か地下運動の勇ましい活動家の社会、あるいは他人の命を救うための自分犠牲を正当化する社会ではない。むしろ、任務を果たすべく組織された囚人たちの社会である。家族から送られた食品、衣服、宝石などを生き延びるために商売する団体として描かれている。こうした描写は、理想的な社会主義国家建設を目指そうとする戦後のポーランドにおいては、非人間的、退嬰的であるとされ厳しく批判されたのである。

6）文体・構成について

ボロフスキは、歴史のなかで先例のない事実についてどのように語ればいいのか、まったく新しい表現法を選ぶのか、あるいは伝統的な文体を選ぶのか、という大きな問題の前に立たされた。

ポーランドの現代文学史においては、デビューしたばかりのボロフスキの文体や語り口（ナラティブ）は、「回顧文学」と「記録文学」のような小説で利用される手法として

は、初めてであった。文学史における非常にめずらしい手法とは、〈アウシュヴィッツ〉という象徴的概念として、人類の堕落過程を、あくまでも冷静な立場に立ち、悲惨さから少し離れて、冷淡に語っていることである。ボロフスキは、アウシュヴィッツの囚人の生活について何を語ったのかだけではなく、どのようにこの現実を描写していたのか、どのような表現法で人間の悲劇を表わしたのかといった点において、現代文学の先駆者と呼ばれるべきである。

アウシュヴィッツを経験した作家は、自分自身を一人の囚人として描写して、収容所において日常生活を落ち着いたナラティブで記述する。アウシュヴィッツを経験していない多くの読者にとって、ボロフスキが叙述している囚人たちの態度は、不正直であり、道徳的でなく、また不思議であると感じさせられる。しかし、この行動が当然であるというような印象を読者はしだいにもつようになる。倫理上や心理学上の観点から見ると、〈極限状況に置かれた人間は生き残るために、何でもし得る〉のである。

すべての作品は、現代文で書かれて、まるで現場にいる記者が行なわれている出来事を冷静に伝達しているかのようである。人間の想像力を超越する現実を、ボロフスキは報告のようなスタイルで語っている。文章が短くて、時には方言やドイツ語のことばも使われている。また、収容所に関する〈専門用語〉を利用するので、アウシュヴィッツの実態をよく分かっている読者にしか向かないように書かれている。実は1946年に発行された『我々はアウシュヴィッツにいた』(Bylismy w Oswiecimiu) に「オシュヴィエンチムの表現」(Okreslenia Oswiecimskie) という小辞典が追加された。刑務所や地下運動のことばと同じように、利用者の間によく使われていたが、一般にはあまり知られていない、アウシュヴィッツでしか使われなかった表現や単語がまとめられた原因の一つは、作品の内容をより深く理解するためであった。

ボロフスキが書いた収容所についての詩のナレーションには、詩的描写より時事評論的な表現の方が多い。だが、ボロフスキは詩に関する知識がかなり深かったので、読者を驚かす贅沢な比喩をたまに使うこともある。このようなクラシックの詩で利用されることばは、収容所における生活を描写する時には、雰囲気的にまったく合わない。それ故に、空虚な決まり文句の存在するいくつかの詩は、非常に平凡なものになってしまった。(むろんそうでない場合の方が多いのであるが。) ボロフスキはアウシュヴィッツの詩で使用できる適切なことばと形式を、詩を書けなくなるまでに、ずっと探していた。それ故に、様々な様式を試してみた。しかし、自分が満足させる適当なことばも、適当な形式も見つからなかった。それだから、彼の詩は、ときどき不自然な響きをたてるのであると思う。

ボロフスキのすべての詩は、怒っている若者の日記、ルポルタージュ、残酷な現実に

対する個人的なノートのような形をしている。伝統的形式や詩的な装飾を避けて、むしろ詩より散文の構造に近く、詩的叙情より自己反省や時代反省の方が多い。実際、彼は「愚かな人だけは詩のなかで比喩を探す」(「詩と詩人について」より)と書いている。

ところで、話は変わるが、ボロフスキのポーランド語の表現は上品でなく、非常に荒々しいものであり、彼の詩を日本語に翻訳する際、適切な表現を見つけるのは、とても難しい作業である。日本語にはこのような下品で野蛮な語彙は少ないかもしれないと思う。原本の〈乱暴さ〉が自分の訳文にあまり感じられない。

ボロフスキの詩の構成・構造の問題を検討してみよう。彼が作った詩の特徴の一つは、美しいクラシックの韻に合わせた音律のある詩ではなく、恐ろしい現実をできるだけ写実的に描写することである。時には超写実の作法を使い、乱暴なことばを折り込んだり、実情の核心を自分の熱心さで認識したりしており、「彼の詩は、観察目の鋭さで、また良心の不安で、深くて、残念に不治の、精神的な衝撃のために美しいのである」[(10)]と、評論家ドレヴノフスキは評価する。たしかに、彼の詩には諷刺、皮肉、現実の訴えが漂っているが、超越的なペーソス、不自然な表象、描いている現実に合わない嘆きや悲哀の感情はほとんどない。たまに生き残った自分を非難する詩もある。しかし、彼の声は悲嘆の声ではなく、あまりの激怒のため、叫び声のようである。

ここでボロフスキの詩を日本の詩と比較してみれば、興味深い対比性を見出だせる。たとえば、原民喜は漢字と平仮名を使用する通常の書記法の代わりに、ダダ的作法で全部を片仮名に書きにする試みをする。普段目に丸く見えることば、つまり平仮名で、叙述することができない場面を、眼には瓦礫のように見えることばで描こうとしたからである。だが、日本人は平仮名・片仮名・漢字を使って自分を表現できることに対して、私たちヨーロッパ人は、アルファベットしか使わないので、様々な感情を書きことばより、音で表わすことになる。ボロフスキはその一人である。耳には聞き辛く、固い表現を使って、発音しにくいことば、長いことば、場合によって、このことばをぎっしり書いたりする時、怒りや叫びを込めているように感じる。翻訳の場合は、この言語的な結果を精密に映し出すことがあまりできないので、詩の質は少し落ちるであろう。また、語彙の問題は、以前に述べた通り、ここにも出現する。

ボロフスキは点々、あるいはダッシュを頻りに使うとき、考え込み、黙考、思想の中断を表わしている。この場合は、日本語も、ポーランド語も同様な句読点が使われている。

おわりに

ボロフスキが自殺した年の1951年に、有名な哲学者T.W.アドルノは、こう言った。

「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である。」彼のことばをパラフレーズすると、我々は強制収容所を創設した時代に入ったころから、詩の表現を変えなければならなくなった。優しい感情、友情、愛を、それまでは理想的に表現できた叙情詩を、現在そのままでは作ることはできなくなった。すでにことばは足りない、不充分になった。ボロフスキはそう認識した詩人の一人であったのではないか。そのテーゼを支えるために、私はボロフスキの詩について本論を書いた。アウシュヴィッツを経験した詩人は、その後もこのアウシュヴィッツについて詩を作った。だが、彼の詩は野蛮なことばになったかというと、それはそうではない。語ろうとしたら、何でも詩の形式で語れるが、たしかに、わたしたちが慣れているクラシックの〈詩〉のイメージと大分違う形式になるであろう。

たしかに、詩人である彼にとっては、アウシュヴィッツを詩で語る作業は、途中で不可能になった。詩より適切なことばは、散文となった。戦争直後、彼は詩人から時事評論家と小説家へ変化する。

ボロフスキは詩の様式でこのアウシュヴィッツの悲劇を語ろうとした。完璧にこれを伝えたかどうか、読者はそれぞれ自分の立場でしか判断できないが、私は、彼の「収容所文学」の詩を積極的に評価する。〈ほとんど不可能なことが、よくできた〉ということがボロフスキの詩についての私の最終的な評価である。

注

(1) 彼の逮捕の原因は、まだはっきり分からない。地下大学のポーランド学科の学生であったからとも、あるいは、前日に彼の婚約者、マリアが逮捕されたからとも言われている。もう一つの仮説を立てるとするとならば、ボロフスキはユダヤ人ではなかったかという説も立てられるが、今、これを論証することはできない。

(2) ボロフスキ自身が書いた短篇は「ハルメザヌィにの日」(Dzien na Harmezanach)、「皆さま、ガス室へどうぞ」(Prosze panstwa do gazu)、「我々のアウシュヴィッツにて」(U nas w Auschwitzu...) と「行っていた人々」「Ludzie, ktorzy szli) であった。まだミュンヘンにいた時期 (1945年) に書いた「ソスノヴィェツ・ベンヂンの護送」(Transport Sosnowiec-Bedzin、その後は「皆さま、ガス室へどうぞ」の題名に変えた) と「ハルメザヌィにの日」という二つの短篇小説が文学の月刊誌『トゥフゥルチョシチ (創作)』(Tworczosc) に1946年4月、つまりボロフスキがまだポーランドへ戻っていない時に発表された。

(3) Tadeusz Drewnowski "Ucieczka z kamiennego swiata. O Tadeuszu Borowskim" PIW Warszawa 1977 に拠る。参照144—147頁。

(4) 本論に引用される詩は Tadeusz Borowski "Poezje" PIW Warszawa 1984 に拠る。

(5) Tadeusz Drewnowski "Ucieczka z kamiennego swiata. O Tadeuszu Borowskim" に拠る。144頁。

(6) これらは「収容所文学」の作品とも言えるが、必ずしもアウシュヴィッツ収容所だけを扱

っているのではない。すなわち、ダウトメルゲンとダッハウ＝アルラッハ強制収容所と戦後の米軍のフライマン収容所の生活について記述している。ボロフスキの死後、詩・ルポルタージュ・短篇小説などが『タデウシ・ボロフスキの作品全集』全5巻（Tadeusz Borowski, Utwory zebrane w pieciu tomach 初版 1954）として刊行されたが、収容所の思い出は全部でおよそ100ページの分量しかなかった。

（7）〈愚かな攻撃〉という表現が使用されるが、原語の szarza は一般的には、第二次世界大戦の勃発頃にポーランドの兵士たちは刀を手に取り馬に乗って、戦車に向かって〈愚かな攻撃〉をしたことをいう。

（8）ボロフスキは地下運動の活動家という罰でアウシュヴィッツに入れられた。彼は政治犯として処された。

（9）〈ラムパ〉は、ボロフスキの「皆さま、ガス室へどうぞ」を翻訳した小原雅俊氏によると〈積み卸しホーム〉であるが、収容所に関する資料では〈荷降場〉という表現としてよく使われている。

(10) Tadeusz Borowski “Poezje” PIW Warszawa 1984 p.16

（Urszula Styczek　広島大学）